

【研究テーマ：版表現における習慣化された行動の蓄積と自己の形成についての研究】

造形専攻 美術研究領域
22452005・齊藤桜香

学修の背景・目的

社会の中では他者から評価されることを意識し、好感を与えるような一時的な自己を表に出すことが求められる。そしてそれらが自身と乖離しているほど、自己の在り方について違和感を抱えることも少くない。しかし自己は一時的なもので繕うことはできず、食事や睡眠のように日常の中にある習慣の連続によって日々形づくられていくのではないかと考えた。

本研究では、版表現において反復的な刷りの技法に着目し、日常の中にある連續性と自己の形成の在り方を重ね合わせて研究・制作を行なった。

方法

1.日常生活の記録とモチーフの選定

自身の生活を対象に、日記形式で起床・就寝時刻や飲食の時間などを記録し、タイムログとしてそれを継続した。これにより、日常の習慣行為が連続的に積み重なっている様子を可視化し、同一の行動であっても時間帯や対象物の偏りによって変化が生じている点に着目した。その記録をもとに、衣服や食器、寝具など身の回りの物を制作のモチーフとして選定した。

2.刷り重ねの技法による表現

インクを厚く刷り重ねることは版の技法の特徴にある反復行為であり、蓄積そのものと考えた。そのため、刷り重ねる行動を画面の中で可視化するために、インクに粉末等の物質を配合し刷り重ねに使用した。さらに、スクリーンの粗さを制作過程によって使い分けることで、インクが一度に押し出される量が変化し、それらが絵肌として現れるようになった。

最終的に蓄積の層と図像の描画がある層では同じ刷り重ねの技法であっても、厚みや表情に違いを生み出した。

経過

制作過程では自身の身の回りに存在する蓄積や痕跡、時間の経過とともに現れる変化に注目し、観察と収集を繰り返した。その際カーペットにある家具の脚の跡、本に長期間挟まれていた葉の跡など、物体同士が長時間干渉していることでその年月がへこみや溝として表面に現れる点に注目した。

これを踏まえ、記録の文字部分にインクが付着しないよう配置して製版を行い、画面全体にインクの厚みを刷り重ねる方法へと展開した。その結果、目止めされた文字部分が溝として残り、蓄積の痕跡が画面上に現れる構造となった。

さらに、その厚みの上からモチーフの図像を刷り重ねることで、溝になった文字部分にはインクが付着せず、記録がより鮮明に出現する作りへ変化した。

また、厚みを刷り重ねる際、刷りムラによって絵肌に生じた凹凸には図像が乗らない箇所があったり、逆に溝となっている文字部分にインクが詰まることで制作過程における偶然性が画面に影響を与えるようになった。

結果

結果として、自身が行った記録の蓄積とそれらを作品の画面上に刷り重ねというかたちで可視化することで、習慣の繰り返しと版表現における反復行動の両者を同時に表現できた。

また、記録を行い自身の生活に目を向け、その内容を制作へ反映させ、また制作での課題を解決するために再び自身の生活に目を向けなおす。それらの反復を繰り返すことで自己と作品の積み重ねを版表現を用いて実現させることができた。